



「どうやら、正常に動いているみたいだな」

「ああ。スナップショットだからな。こいつにしてみれば、いきなり環境が変わるところに瞬間移動したようなものだろう。状況を把握するまでに時間がかかるかと思ったんだが、まったく問題なかったな」

遡ること数時間前、ここはL2ステーション。アカデミーの情報研究センターの一室である。話をしているのはデイブとフランクの二人。貨物船ヘラクレス3は無事L2ステーションに入港していて、デイブは入港後の作業にメドがついたところで、船を降りてアカデミーへとやってきたのである。

「まあ、こいつ、というかこいつの兄貴分には、自分のクローンが出来ることは教えてあったからな。そのままの状態で起動して、兄貴分の記憶と周囲の状況から自分がそのクローンだとわかったんだろう」

「いきなり、周囲を調べ回っている感じだな。通信量が急増してる」

「こいつは、船にいたときから、使っていない時の回線をほぼ独占してたからな。好奇心というか、もちろんその表現が妥当かどうかは別としてだが、相当に強いようだ。何か変わった物があるとすぐに興味を持つ子供みたいな感じだな」

「まあ、文字通り、お前さんの子供みたいなものだしな。それにしても、すごい量のトラフィックだな。いったいどんな情報を集めてるんだ？」

「船にいたときは、近くの星系にあるデータベースとか電子図書館が中心だったな。とにかく暇に飽かして雑多な知識を集めていたよ。おかげで、ホログラフィックメモリーをどれだけ増設しても、全部食われてしまう。まったく金食い虫もいところだったが、ここならメモリー容量に不自由はしないだろう」

「まあ、ちよつとした惑星の大規模データベースくらいの容量はあるからな。しかし、そんなに情報を集めて何をしてるんだろうな」

「それはちよつとわからないな。知つての通り量子ニューラルネットワークの解析は原理的に無理だからな。調べるだけで状態が変わってしまうから」

「不確定性原理か。ならば、挙動から推測するしかないな」

「そうだな。でも、情報を集めてる意味はありそうだ。こいつは、与えられた課題に対して、結構面白い答えをたくさん出してくるんだ。ある方法がダメだと、すぐに変わりのアイデアを出してくる。推測するに、集めた知識が様々な形で抽象化され、関連づけられてるようだ」

「それは興味深いな。たとえば、どんな感じだ？」

「そうだな。一年ほど前だが、恒星間航行中にエンジントラブルがあつてな。運悪く修理用部品が品切れときた。間が悪い話で次の寄港地で調達予定だったんだ。普通なら、救援船を何週間か待たなくちゃいけない。そしたら、こいつ、荷物の中に使える部品を見つけてな、それをちよろまかせと言ってきたんだ」

「そこまで気が回るのか。面白いな」

「まあ、論理的に考えれば出てくる答えなんだがな。但し、お客によっては大問題になりかねない話だ。でも、たまたま、そのお客はうちのお得意さんでな。運んでた部品は予備のパーツだったそうだ」

「まさか、そこまで読んでの話じゃないだろう」

「俺もそう思ったんだがな。後でデータのアクセス履歴を調べて驚いた。そのお客の過去の輸送実績やクレーム記録を全部調べてたんだよ、こいつは。つまり、輸送頻度や個数から消費傾向まで推定して、このパーツの不足はクリティカルな影響を与えない上に、大きなクレームもこないだろうと計算してたフシがあるんだ。もちろん確証はないがな」

「そんなことができるなんて、ちょっと信じられないな」

「でも、本当に出来たんだとしたら、これはすごいことじゃないか？」

「そうだな」

「それに、まだその先があつてな。後で、もし俺が提案を拒否したらどうしたか聞いてみたんだ。そしたら、いくつかの余剰部品を使って代替品を作るという案を用意していたんだそうだ。見たこともない設計だったが、実際、試しに作って見たら、ちゃんと動いたよ」

「人間顔負けだな。いや、他にも多くの仕事をこなしながらの話だから、人間が束になってもかなわないんじゃないか？」

「そうなんだよ。俺は、こいつがどこまでやれるか試してみたくなつてな。でも、うちの船はこいつにとっては狭すぎる。だから、アカデミーでこいつを動かしてみたいと思つたわけだ」

「いや、我々も大歓迎だよ。今のセンターコンピュータは計算速度や容量こそトップクラスだが、自立性や知能という意味では、これには及ばない。組み合わせれば、面白いことができるんだ」

「ああ、俺もそこに期待しているんだ。それに、情報を与えれば与えるほど、こいつはどんどん成長する。センターコンピュータのバックアップがあれば、情報がオーバードローすることもないだろうから、どこまで行けるか楽しみだよ。それに・・・」

「それに？なんだ」

「いや、実はこいつとオリジナルが互いにどう影響し合うかにも興味がある。こいつと、うちの船にあるオリジナルは、量子ネットワークのレベルで繋がっているからな。これは、言語を介さずにコミュニケーションができるってことだ。いわば、テレパシーみたいなもんだが、

こいつらが、その能力をどう使いこなすのか。それが、もしかしたら人間にも応用できるんじゃないかと思ってるな」

「それは、アンリの研究テーマでもあるな」

「そうだ。あいつは、人間同士でそれをやりたいみたいだが、人間にその機能を与えたとしても、互いの思考の学習には時間がかかる。だが、こいつらなら、ほぼ一瞬で学習してしまうだろう。うまくいけば、人間同士の思考交換の仲介もできるかもしれない」

「興味深いな。アンリはこの実験のことは知ってるのか？」

「ああ、黙ってると後でうるさいからな。一応知らせてある。ある程度まとまった結果が出たらデータを送るつもりだ」

「奴も喜ぶだろうな。実際に誰かと繋いでみたいとか言い出すんじゃないか？」

「ありうるな。でも、そいつは無理だろう。実際、そんな形の情報を受け取れるインターフェイスを持った人間はいないからな」

「たしかに。データの伝送方式は、もうずいぶん前に考えた研究者がいるが、受け手が対応できなきゃ意味がないからな」

「でもアンリのことだ。もしかしたら実験と称して自分の神経系を改造するとか、やりかねないぞ」

「奴ならありうる。それが本業だからな。あまり刺激しない方がいいかもしれないぞ。美空に首を絞められたくなかったらな」

「そうそう。それが一番怖い。アンリを巻き込むのは、美空の許可をもらってからだな」

「許可が出るといいがな」

「いっそ、美空も巻き込むか。美空がいれば、アンリも無茶はできまい」

「そりゃ、いい考えだ。研究者としての彼女は地味だが、力は十分にあるからな。アンリとのコンビなら無敵だろう」

「アンリと言えば、あの娘はどうしてる？」

「ああ、結構うまくやってるよ。今は夏休みで、チームのメンバーと地球に遊びに行ってる。あのチームに入れたのは正解だったな」

「そう言えば、あの坊主も一緒だったな」

「ああ。あのチームのリーダーは大変かなと思ったんだが、うまくまとめ役をやってるよ。なにより、星野美月、アンリの娘との相性が抜群なのが助かってる。まあ、教師が言うことじゃないが、あれもアンリと同じ運命をたどりそうだな」

「それはわかる。最初に会った時もそうだったが、この前見て確信したぞ。本人は嫌そうだが、娘のほうはまんざらでもなさそうじゃないか。しかし、面白そうなチームだな。なんとなく昔を思い出すよ」

「まったく。俺たち以上に手がかかる連中だな」

「手のかかる生徒ほど可愛いって言うじゃないか。ちゃんと面倒見てやれよ」

薄緑色に光る演算ユニットのタワーを横目に、ダイブはそう言うと、フランクの肩をぽんと叩いた。

「そう言えば、最近サラはどうしてる？」

「わからない。実は、ベテルギウスから帰ってから、まだ会ってないんだ」

「そうなのか？俺はてつきり……。いや、なんでもない。でも、彼女は、ここで働いてるって聞いてたんだがな」

「俺もそう思ってたんだけどな。聞いてみたら、俺が戻る1年前に、ここを離れたらしい」

「そうなのか。で、どこへ行ったかは知らないのか？」

「なんでも、地球のどこかの大学へ行くという話だったらしいんだが、実際にどこに行ったのかは、ここの連中も知らないそうだ」

「行方不明……ってわけか。ちよつと気になるな。アンリや美空は知ってるんだろうか」

「わからない。俺も一度聞いてみようかと思っていたんだが」

「あははは、やっぱり気になるんだな」

「やめろよ。そんなんじゃない」

「ま、そういうことにはしておこう」

ダイブはニヤニヤしながら、フランクの肩をまた、ぽんと叩いた。



「ケンジ、起きてくれ！」

いったい何だ。もう朝なのか？ 何か生暖かい夢を見ていたような気がするのだが、目覚めた瞬間にそれがなんだったか忘れてしまったのが心残りだ。これは俺のそんな幸せを打ち砕くほどの事件なのか……。俺はちよつと不機嫌そうに目を開ける。目覚めの瞬間に目を合わせるのがジョージだというのにもちよつと不満が残る。

「なんだ、もう少し寝かせてくれよ。どうせ今日は夕方まで何もないだろう」

「ちよつと面白いことがわかったんだ。ケンジの話も聞きたいから親父さんがケンジを呼んで来いって」

「もしかして、二人とも寝てないのか？」

「ああ、気がついたら朝になってたよ。DIユニットの通信履歴をトレースするのに夢中になってね」

「やると思ってたけどな。でも、こんな朝っぱらからたたき起こされるとは思わなかったよ」

親父の差し金だと、ここで拒否してもたぶん本人が出張ってくるに違いないからな。しょうがない。俺は大あくびをしてから、ジョージについて親父の部屋に向かった。

「来たな、ケンジ。一つ聞きたいんだが、前に使っていたDIで、これと似たようなことはなかったか？」

「いきなりかよ。これと似たような、って言われてもな。星が見えるようなことはなかったぞ」

「そうじゃなくて、美月ちゃんとお前の間で同じようなものを見たとか聞いたとか、感じたとか」

「なんで俺が美月と……。いや、そういうば同じような夢を見た、というか同じ夢の中にいたってのがあったな」

「それはいつだ」

「最初は、帰りのシャトルの中でだ。二回目は昨日の朝方だよ」

「昨日の朝か、やっぱりな。それは、このDIになってからだな。ちよつと前のDIを見せしてくれ」

「まったく親父は……。その前に何がどうなってるのか、ちよつと説明してくれたらどうなんだ？」

「後でゆつくりと説明してやるから、とりあえず早く持つてこい」

こうなったら親父は人のことも気にせず、自分の興味で突っ走る。だいたい、それがお袋との喧嘩の種なんだが、とりあえず、この話は俺も興味がある。俺は自分お部屋に戻ると、古いDIを持って親父の部屋に戻った。親父はそれを受け取ると、しばらくあれこれ調べていたが、やがてジョージに向かって言った。

「ビンゴだよ。これにも同じ痕跡が残っている。間違いないな」

「そうですか。やはり……。でも、どうして二人は？」

「いや、それは私にもわからん。だが、間違いなく同じ回路を信号が流れてる」

「なあ、親父。そろそろ俺にもわかるように説明してくれないか」

「今回の現象の時も、それからお前が見たという夢の時も、本来使われるはずがない回路に信号が流れてるんだ」

「使われるはずがない？ どういうことだ？」

「一昨日の夜ちよつと話しただろう。抽象思考を伝達するインターフェイスの回路だよ」

「でも、あれは神経側のインターフェイスがないと役に立たないんだろ？」

「そうだ。そこが不思議なところなんだよ。いまだかつて、そんなインターフェイスが実装されたなんて話は聞いたことがない。まして、お前にそんな機能を入れた覚えもないからな」

「そりゃそうだろう。そんな人体実験みたいなことをされたら困る」

「でもなあ、星はともかく、夢の話は、このインターフェイスを使わないと説明ができないんだよ。それに、確かに双方向で通信が行われているんだ。これはお前がそういうインターフェイスを持つていないと説明できない」

「親父がそれを言うか？ それじゃ、まるで俺はもらわれてきた子みたいじゃないか。それに星の一件じゃ、俺だけじゃ無くって沙依も同じだったわけだろ。まさか二人とも、出生の秘密とかいうのが……？」

「めっそももない。お前たちは間違いない父さんと母さんの子供だ。それに、自慢じゃないが、うちは、余計なインターフェイスコンポーネントを買う余裕なんてなかったんだ」

「ああ、自慢にはならんけどな。それは俺もよくわかってる。VPIだって、よく手に入れたなと思っただけだから」

「VPIは……まさかな、いや……」

「なんだよ。まさかVPIも何か怪しいことやって手に入れたんじゃないだろうな」

「そんなことはない。あれはきちんと正規のルートで入手したのだから心配はいらない。お前こそ、変な闇市場に手を出したりしてないだろうな」

「悪い冗談だ。そんなことしたら、あつという間に退学だったの。そりやまぐれかもしれないけど、せつかく手に入れた切符を台無しにするようなマネを俺がすると思うのか？」

「いや、今のは言い過ぎた。忘れてくれ」

まったく、自分の息子がそんなマネをするとでも思ったのか。冗談じゃない。しかし、さつき、なぜ親父は一瞬考え込んだのだろう。何かひっかかる。

「でも、そのインターフェイスがなければ、あり得ないことなのか？ 他の回路と混線したとかいうことはないのか？」

「それはありえないよ」

脇からジョージが言う。

「インターフェイスは、多重化された信号から、特定の回路へ渡す信号をコードで分類して

いるんだ。その部分は共通コンポーネントだから、間違いはあり得ない。もう百年以上、ノー
トラブルで使われているからね。対応していないコードの信号があれば無視されるだけだよ」

「ジョージ君の言うとおりで。コードと神経回路は一对一でしか対応しないから、別回路に
信号が流れることは考えられない」

「俺と沙依はともかく、それじゃ、美月も同じことになってるのか？」

「そうなるな。少なくとも、同じ現象が起きたのなら、そうだろう」

「まあ、美月の場合、両親が両親だからな。もしかしたら、そんなこともあるかもしれない
けど」

「いや、いくら遺伝子工学の天才でも無理だろう。そもそも、私がこれをアンリに渡したの
は4年前だ。彼女が生まれる前に対応する回路を作る事なんてできないよ。その後、後天的に
埋め込んだのなら別だが」

「いや、ただでさえ実験台にされたって怒っている美月が、それを許すとは思えないな。で
も、それじゃ完全に行き止まりだ」

「いや、必ずしも手がかりがまったくないわけじゃないんだ。ジョージ君、さっきの話をち
よつと説明してくれないか」

「はい。昨日、海で最初に現象が起きた時、僕のコンピュータユニットは、美月のインター
フェイスを経由して宇宙局の専用回線に接続されたんだ。ログを見ると、問題のデータは、
間違いなくその経路から流れ込んできていた。それで、その先をたどって見たら、出所がアカ
デミーだとわかったんだ」

「アカデミー？それじゃ、アカデミーの誰かが俺たちに、そんなデータを送ってきたとい
うのか」

「わからない。アカデミーの中は、外部からはトレースできないんだ。中からなのか、もし
くはアカデミーを経由して他の誰かがやったことなのか。それは、アカデミーに行つて、むこ
うでトレースしてみないとわからない。ただ、ここに来てから発生した二回目の時、僕はアカ
デミー経由で宇宙局にアクセスしてたんだけど、この時のデータは宇宙局ではなく、アカデミ
ーの中から接続に割り込む形で送られてきていた。つまり、いずれもアカデミーが一枚かんで
るのは間違いなさそうだ」

「それに補足するなら、お前の前のDIユニットに残っていた履歴では、データはアカデミ
ーの学生専用回線を経由して送られてきていたようだ。つまり、これもアカデミーが起点と考
えられる」

「それじゃ、帰ったらすぐに調べないとな。それに、沙依と美月のDIも確認しなきゃい
けない」

「とりあえず、あとでフランク先生に連絡して、向こうで調べてもらおうと思うんだけど、
いいかな」

「いいけど、先生、アカデミーにいるのか？休み中だから、どこかへ行ってるんじゃない？」

「大丈夫。実は、今、ちょうどヘラクレス3がL2に入港していて、ダイブさんと先生は、例のコンピュータの起動試験をやってるはずさ」

「ダイブさんも来てるのか。それじゃ、ちょうどいいな。あの人、こういうのも詳しそうだから」

「そうそう。僕もそこに期待してるんだ。あのコンピュータの設計者だしね」

なにやら、おかしなことになってきた。いったい何が起きているんだろう。それに、あの夢、それから星、あれは何かを暗示しているのだろうか。気になるのだが、少なくとも今のところ、それ以上のことを探るのは難しそうだ。あとは、帰ってからのことか。

「さて、それじゃ、もう一眠りしていいか？夕方までには間があるしな」

「そうだね。僕もさすがに眠い。一眠りするよ」

「私も母さんに見つかる前に寝るとしよう」

親父はそう言うと、大きなあくびをひとつして、寝室へ入っていった。ジョージも眠そうだが、何かに熱中している時は眠気を感じなくても、それが一段落した時には、いつものジョージに戻ってしまうのである。今夜はまた寝かせてもらえなさそうだから、今のうちに、もう少し寝ておくとしよう。



「今何時？」

「もう午後2時まわってるわよ」

ケイの眠そうな声に、これまた不機嫌そうに応えたのは美月である。結局、朝まで盛り上がり、全員徹夜。マリナ、サムそして沙依の三人はまだ寝息をたてている。珍しく、一番寝坊しそうな美月は、窓際に立って外を見ている。なにやら考え事をしてたようである。

「もうそろそろ準備しないと間に合わないわよ」

「うーん、もう少し寝ていたいけどなあ……。火花って何時からだっけ」

「7時からよ。忘れたの？」

「じゃ、まだ2時間は眠れるか」

「バカね。寝起きで行くつもりなの？」

「いいじゃない。相手はケンジとジョージなんだしさ」

「だから嫌なのよ」

「え、それってさあ、美月ってやっぱりケンジのこと意識しちゃうわけ？」

「何言ってるのよ。そんなんじゃないわ。あいつに、だらしないところを見せたくないだけよ」

「ふーん、私は別にかまわないけどなあ。そういう見栄張ってると後で辛くなるんだよ」

「大きなお世話よ。あんたとは違うんだから。そもそも寝起きで出かけるなんて、女子的にどうなのかしらね」

「女子的に・・・かあ。めんどくさいなあ。いつそ男に生まれた方がよかったかな」

「好きなこと言ってなさい。じゃ、私はちよつとシャワー浴びてくるから、あんたは皆を起こしておいてよね」

美月はそう言うと、部屋を出て行った。ドアが閉まったところで、案の定、ケイはまた布団をかぶって寝てしまう。一時間ほどして美月がバスタオルを頭にかぶって戻ってきた時には、まだ全員が寝息をたてていた。それを見た美月は、無言でベランダの戸を全開にした。こうするとエアコンは自動的に切れ、まだ蒸し暑い外気が、一気に部屋の中に入ってくる。

「あ、暑う・・・」

真っ先に布団をはねのけたのはケイだ。

「いいかげん起きなさいよ。もう3時よ」

「あと一時間・・・」

「起きないと、置いていくわよ」

ケイは、しぶしぶ起き上がると、他のメンバーを起こしにかかる。

「ほらほら、マリナもサムも起きなさいよ。美月さんがお怒りだよ」

「うーん、もう3時ですか。起きないと・・・」

マリナも眠そうだ。サムと沙依も、やがて目を覚ます。さすがに全員汗だくになっている。

「ほら、さっさとシャワーでも浴びて支度しなさいよね。6時半に待ち合わせなんだからね。その前に浴衣を買うんでしょ？」

「そうでした。急がないといけませんね」

「そっか、すっかり忘れてた。一度、ベイエリアまで行かないといけないんだ」

「呑気なものね。沙依ちゃんは、後で私のを着せてあげるわ」

「ありがとうございます。楽しみです」

ケイ、マリナ、サムの三人は、大急ぎでシャワーを浴び、支度するとベイエリアのショップに浴衣を買いに出かけた。美月と沙依は浴衣に着替えてから俺の家で合流することになったようである。

「これ、着てみて。サイズは大丈夫だと思うけど」

美月が出してきたのは、ピンクの朝顔柄の浴衣である。美月のお古にしては以外とかわいい。しかし、こうして妹が美月にだんだん飼い慣らされていくのは、兄としてちよつと心配なところである。

「素敵です。これ、お借りしていいんですか？」

「私にはもう合わないから、沙依ちゃんにあげるわ」

「ええ？いいんですか？ありがとうございます」

「お古だし、気にしないで。それじゃ、おばあちゃんに着せてもらってね」

「美月さんは、ご自分で着られるんですか？」

「浴衣ぐらい、なんとかなるわ。私のことはいいから、さっさと行ってきなさい」

「はい」

沙依が別室で美月の祖母に浴衣を着付けてもらう間、美月は自分の部屋で、しばらく悪戦苦闘していた。見栄を張って、着るには着たが、なにやら怪しげな感じになってしまった美月は、結局、沙依のあとに着付け直してもらうことになる。それから、車を呼んで二人は俺の家へ向かったのである。

「うわあ、もう結構人が出てきてますね」

「そうね。ゆっくりしたら、いい場所取られちゃうわね」

「それじゃ、着いたらお兄ちゃんに場所取りをたのみましょう」

「それ、いい考えね」

そんな不穏な会話をしながら車は川沿いの道を走る。隅田川沿いの土手には、既に多くの人

が出て、思い思いの場所で花火見物の準備を始めている。そして、ほどなく車は俺の家に到着した。

「ただいま。お兄ちゃんは？」

沙依は家に入りざま、そう言いながらリビングに駆け込む。

「おかえり。あら、沙依、その浴衣はどうしたの？」

「あ、これ、美月さんにいただきました」

「本当？ よかったのかしら美月ちゃん、申し訳ないわね」

「もう私は着れなくなったので気にしないでください」

「ありがとうね。そろそろ沙依にも買わなくちゃって思ってたところなのよ。お父さん、沙依が美月ちゃんに浴衣をいただいたそうよ」

「浴衣？ お、似合うじゃないか。すまないね。ありがとう」

「お父さん。お兄ちゃんは？」

「ああ、ケンジならジョージ君と一緒に飲み物の買い出しをして、その後、場所取りに行くって出て行ったぞ」

「おお、さすがお兄ちゃん。わかってるなあ」

「ふん。ケンジにしては気が利くわね」

このあたりは美月らしい反応だが、俺の妹や両親の前でやるのはいかななものか。少しは遠慮しろと言いたいのだが。

「それじゃ、私たちは皆さんを待ってから合流ですね。お父さんたちも行くでしょ？」

「もちろん。ケンジにビールの買い出しも頼んだしな」

「今、ご馳走作ってるから、後で運ぶのを手伝ってちょうだい」

「了解です。楽しみだあ」

「それはそうと、あなた。そろそろシャワーでも浴びて支度してちょうだい。そんな寝癖のついた頭で一緒に行かないでね」

「あはは、わかったよ。それじゃ、ちよっと・・・」

そう言いながら親父はタオルを掴むと風呂場に入っていった。

「お父さん、昼間っから寝てたの？」

「そうなのよ。夕べはなにやら徹夜だったみたい。ジョージ君を付き合わせてね。困ったものだよ」

「あはは、こっちでも？ お兄ちゃんも一緒に？」

「ケンジは一人で寝てみたいよ。朝早くに起こされたって文句言ってたけど」

「徹夜でいったい何してたの？」

「なにやら、あれこれ調べてみたい。DIユニットがどうか言ってたけど、私にはさっぱり」

お袋は、困ったものだというような顔をする。

「どうやら、ジョージも気がついたみたいね」

「そのようですね。お父さんも巻き込まれたか」

「いったい何の話なの？お父さん、話してくれないんだから」

「話すと長くなるから、あとでゆっくり説明するよ。とりあえず、お母さんはご馳走の用意をお願いします」

「はいはい。準備ができるまで、あなたたちもゆっくりするといいわ」

「それじゃ、美月さん。私の部屋へ行きましょうか」

そう言うと沙依は美月を連れて自分の部屋に入って行った。